2022 年度　教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部　学科	職位	氏　　名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	宮本 佳範
最終学歴	学　位	専門分野
名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士後期課程修了	博士 （人間文化）	社会学

Ⅰ　教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

（理念）

観光に関する専門的知識を教授するとともに、幅広い教養および観光を題材に社会人として広く求められる力、いわゆるジェネリックスキルを育成する。

（目標）

観光・サービスコースの学生及び特に観光について深く関心がある学生には、観光に関する専門的な知識や諸問題に関する考え方を理解し、考察する能力を育成することを目標とする。

特に観光を深く学びたいというわけではない学生に対しては、授業のなかで観光に関する事例をきっかけにしつつも、幅広く周辺領域、関連知識に話を広げるなかで、一般常識・教養を身に着けることを目標とする。

（方針）

対話とアクティブラーニングを重視し、教育効果を高める。

（計画）

知識伝達型の講義（基礎科目・概論的な講義）においては、学生への発問等を増やし、学生の参加、学生自身が考える機会の創出につなげ、集中力と理解の増進を図る。

また、基礎科目・概論的な講義以外の講義科目では、「講義」に加えグループワークや学生による発表などの機会を積極的に取り入れた授業運営を実施する。

ゼミでは、主に企画系コンテストへの参加を目標とすることで、学生のモチベーションを高めるとともに、グループワークを通じてコミュニケーション力を高めていく。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

観光資源探究、地域観光論、観光マネジメント、国内観光地理、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）

観光学、レジャー産業論、現代観光論、海外観光地理、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

計画に記載したとおり、講義科目においてはその科目の専門的な知識の伝達以外に、各地から、考える力、表現力などのジェネリックスキル育成を意図した方法を取り入れた。特に、地域観光論、現代観光論、レジャー産業論、観光資源探求などで、授業の一部にグループワークや発表を取り入れた。

2 年生のゼミでは、JAF 主催の「あいち学生ドライブスタンプラリーコンテスト」および、観光者

を送り出す視点を学ぶために「海外卒業旅行企画コンテスト」に向けた企画に取り組んだ。前者では書類審査を勝ち抜き、プレゼン審査に進むことができた。後者についてはコロナ禍でコンテストが中断され、今年度も開催されなかったため提出はできなかったが、企画自体は計画通りすすめることができた。

3年生のゼミでは、観光者を迎え入れる視点を学ぶために、「あいち観光まちづくりアワード」に取り組んだ。その結果、数年ぶりに1次、2次審査を通過し、本選出場を果たすことができた。

○作成した教科書・教材

観光系科目群の基礎科目である観光学および観光マネジメントについては、学生の学びやすさ、ノートの取りやすさに配慮し、重要事項をまとめた穴埋め形式のプリントを作成した。4年生のゼミでは、卒論の書き方に関する資料を作成した。

○自己評価

今年度は、新型コロナの蔓延も一段落し、基本的に担当科目はすべて対面で行った。その結果、当初予定していた対話側の授業やグループワークや発表といったアクティブラーニング型の授業を計画どおり行うことができた。

ゼミ活動についても、各学年の取り組みを円滑に行うことができた。特に2年生の総合演習で取り組んだJAFの「あいち学生ドライブスタンプラリーコンテスト」ではプレゼン審査まで勝ち残ることができ、また、3年生の専門演習で取り組んだ「あいち学生観光まちづくりアワード」でも本選出場を果たすことができた。

これらのことから、教育活動については当初の計画を十分に達成することができたと考える。

Ⅱ　研究活動

○研究課題

観光者のリスク認識等に関する研究

○目標・計画

（目標）

現在、科研費を得て観光者のリスク認識や思考プロセス等に関する研究を行っている。本年度も、その研究を進めていく。

（計画）

科研費で当初計画していた海外調査は現在のコロナ禍では実施するのが困難であると予想している。しかし、観光者のリスク認識という同じテーマでありつつ、コロナ渦という特殊な状況だからこそできる研究もあると考える。そこで、現在のコロナの状況でも行くことができる国を訪問し、コロナというリスクに対する観光者の認識等に関する研究を行う。

○2015年4月から2023年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

（学術論文）

・宮本佳範「オーバーツーリズムの諸問題と責任に関する考察－観光者の認識と責任の明確化に向けたタクソノミーの試み－」『東邦学誌』第51巻第1号、pp. 1-13、2022年.

・宮本佳範「少数民族観光における観光者の問題行動に関する考察－山岳少数民族が暮らすサバで

の調査から」『日本山岳文化学会論集』第 17 号、pp. 27-36、2020 年.（査読有）

・宮本佳範「問題ある観光を行う観光者の意識－ウルル（エアーズロック）登山最終年の事例から－」『東邦学誌』第 48 巻第 2 号、pp. 17-32、2019 年.

・宮本佳範「観光者管理と観光者倫理－ブータンの事例から－」『東邦学誌』第 47 巻第 2 号、pp. 1-13、2018 年.

・宮本佳範「グローバル化するツアー登山の問題と観光者のリテラシー ： ベトナムのファンシーパン登山を事例に」『日本山岳文化学会論集』第 15 号、pp. 91-101、2017 年.（査読有）

・宮本佳範「ツアー登山問題に関する論点の批判的考察 ： アクセシビリティとツアー登山者の倫理」『日本山岳文化学会論集』第 14 号、pp. 67-75、2016 年.（査読有）

・宮本佳範「観光倫理研究の課題と展望 」『観光学評論』第 4 巻第 2 号、pp. 135-148、2016 年.（査読有）

（学会発表）　なし

（特許）なし

（その他）なし

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

科学研究費補助金（科研費）基盤研究 C　採択　研究代表者　課題番号（20K12415）期間：2020 年 4 月～2024 年 3 月、研究課題名：「観光者の問題行為を誘発する観光者の認知特性、思考プロセス等に関する研究」

○所属学会

観光学術学会　日本山岳文化学会

○自己評価

今年度の前半は、昨年度から執筆していたオーバーツーリズムの諸問題を独自の視点で分類した研究の成果を紀要上で発表することができた。また、新型コロナの落ち着きを想定し、夏季休暇中にインドネシアにおいて旅行者のリスク認識等に関する調査を行う計画をたて、研究の準備、出張の準備を行った。しかし、出発の 2 週間前に、腰椎椎間板ヘルニアにり患し、歩くこともままならなくなったため、海外調査を中止することとなった。以上のことから、やむを得ない事情によるとはいえ、研究を十分にすすめることができなかったと言わざるを得ない。

Ⅲ　大学運営

○目標・計画

（目標）

配属された委員会（教務委員会、FD・SD 委員会、教養教育センター運営委員会）において自らの職責を果たす。

（計画）

今年度は大学の認証評価を受ける年であることから、担当する委員会の諸業務が認証評価の観点から問題ないか等を見直すことを優先的に行いたい。

○学内委員等（事前記載項目）

教養教育センター運営委員会（委員）、教務委員会(委員長)、FD・SD 委員会（委員長）

○自己評価

教務委員会および FD・SD 委員会の委員長としての職務は本年度が初めてであり年間のルーティーンをこなすだけで精一杯であった。教務委員長としては大学の認証評価の実地調査対応などをしたものの、教務の内容等に関する理解の不十分さもあり、完璧な対応をすることはできなかった。そこは改善点である。全体としては、概ね職務をこなすことができたと評価できる。

Ⅳ　社会貢献

○目標・計画

（目標）

自らの専門知識を活かした社会貢献活動（社会貢献につながるような視野を育成する教育活動を含む）を実施する。大学以外の教育の場などにおいて、自らの専門知識を活かした活動を行い、社会貢献につなげる。

（計画）

教育活動（主にゼミ等）のなかで、地域の問題解決を意識した活動に取り組むとともに、高大連携授業等の機会があれば積極的に参加する。

○学会活動等

観光学術学会、日本山岳文化学会

○地域連携・社会貢献等

○自己評価

授業（ゼミ）の一環で取り組んだ「あいち観光まちづくりアワード」や「あいち学生ドライブスタンプラリーコンテスト」では、それぞれ本戦に勝ち残ったこともあり、各主催者や関連団体と交流する機会もあった。教育目的の活動であるが、地域との連携という意味でも評価できると考える。社会貢献については体調の問題もあり、本年度は実施できなかった。次年度に努力したい。

Ⅴ　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

特になし

Ⅵ　総括

今年度は、８月に腰椎椎間板ヘルニアに罹患し、治療に半年以上を要したことが諸活動に大きな影響を与えることとなった。授業および委員会活動はなんとかこなすことができたため、当初の目標を概ね達成できたといえる。一方、研究、特に海外調査は実施できず、コロナにからめたテーマだったこともあり（コロナ禍だからこそできる研究）、調査に向けた準備、研究はすべて無駄になってしまった。次年度は今年度十分に行うことができなかった研究および社会貢献等に力を入れていきたい（ただし、本報告書を書いている時点ではかなり回復してはいるものの、まだ長時間の移動や体に負担をかけることができないため、2023 年度も十分な研究等ができるとはいえない状況である）。

以　上